



連鎖の海

おぼろげだ。8月へと月を跨いだあの2週間程の記憶がどうにも曖昧なのだ。某感染症の急激な拡大の波に飲まれ、発熱連絡の分析、市との協議、人員のやりくり、園内へのアナウンス：濁れかけていた。ちやうど、市内保育施設の休園等に関するルールが、大きく変更された直後だったことも、判断に手間取る要因となっていた。

今振り返ると、あの2週間ほどの時間は、ぎゅっと1日に圧縮されているような感覚。事の起こったタイミングやその順序などもよく思い出せない。一瞬で全てが噴出し、気がつけば全てが霧散していた：そんな錯覚に陥る。

そしてあの時、一瞬正気に戻してくれた唯一の時間、それが夕刻、クラスのブログ(保育日誌)を開く瞬間だった。

そこには、子どもたちを取り巻く何も変わらない日常が



あって、読み進めるうちに、少しずつ、落ち着きを取り戻し、何とも言えぬ安堵感に包まれるのだった。

そして、そこに描かれていたのは、水遊びをはじめとした涼を楽しむ数々の遊びだ。その中で、8/2のはなぐみ(2歳児)の日記「海を作る」に目を止めた。以前の絵の具遊びの中で、一面を青く塗りたくった作品を海に見立て、その中に魚や海藻を泳がせていこうと考えた担任たち。

保育者と一緒に緑色の紙をビリビリと割いたり、色画用紙の上に、赴くまに絵筆を走らせていく。指先を伝わる感触や音、破れた紙の形や筆ならではの描画を、思い思いに味わっている。

担任たちは、紙を破きながら、「ワカメにするんだよ」とか、筆を走らせながら、「魚作っちゃおう」といった声を掛けてはいるが、「かぜグループ(4・5歳児)の部屋にある壁面の海のように、子どもたち自身が明確な目的を持つたり、創意工夫を凝らす



うとしていくわけではない。」と、年上のクラスと対比させながら、目、耳鼻、指先などの五感を通して、まずは素材と関わる楽しさを感じてほしいと記している。

さらには、「まずは保育者が用意した海の演出の中を漂いながら、創作するというプロセスや、出来上がった作品を眺めながら、海やその生き物などに思いを巡らしてみる」くらいの経験で十分であるとも。

そこで早速、4・5歳児の日記を遡ってみると、それは6月の頃から、あることをきっかけに、保育室の壁面を利用した大きな「海」の製作が始まっていた。

(6/8「海」以降を参照)

そこには、保育者の思いとも重なり合いつながり、子どもたちのイメージする海が、ひと月以上の時間をかけて広がり深まっていく様子が、その時々の日誌に記録されていた。そして、その壁面の前に、

潜望鏡まで備える、ダンボールで作った大きな潜水艦まで登場するという展開(6/10「箱を置いてみた」、6/27「にじいろ潜水艦」参照)は、まさに4・5歳児ならではの世界。

そして、先のはなぐみの日記から1週間が過ぎた頃。自宅に深海図鑑が届くことを教えてくれる子、折り紙で作ったタコを見せてくれた子などの登場をきっかけに、「さあいよいよ、私たちが海を作る時が来た。」と日誌に記したのが(8/9「うみぐみだから」参照)、クラス名に「海」を冠した、うみぐみ(3歳児)。

子どもたちが描きやすく、鑑賞もできる高さの壁に横造紙を張ると、「作ったものを飾れるように、海を作ったよ。」と声を掛ける担任。そして、そこに子どもたちが貼っていったその

多くが、なんと、画用紙に何本も切り込みを入れたクラゲ、タコ、イカといったユラユラ



と形を変える軟体動物。

それもそのはず。最近、ユラユラと形を変えながら揺れる得体のしれない生物が、度々テラスの天井で目撃されている。夏の強い日差しが、軒下のタライの水面に反射して映るこの光の揺らめきを、子どもたちはクラゲと呼んで、その出現を心待ちにしているのだ。そんなエピソードも、これまでの日記に度々登場している。自分の心に宿るイメージを、指先を巧みに操って表現できるのが3歳児。

互いの日記を読んでか、壁面を覗いてか、クラス同士も密かに刺激を交換しながら、緩やかに連帯しているのだ。

園庭にトンボが舞い始めると、段々と秋の空気に入れ替わっていく。

園長 折井誠司

●編集 幼保連携型認定こども園せいび  
●発行人 折井 誠司  
●印刷所 折井 誠司  
●発行所 幼保連携型認定こども園せいび  
社会福祉法人 誠美福祉会  
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2  
電話 042-675-1551  
ファックス 042-677-5643  
Email seibi@kodomo-kyo.jp  
http://kodomo-kyo.jp/